

北極に近い南極のまち



わっかない 稚内市長(北海道) 藤 工 藤 広



氷雪の門(樺太島民慰霊碑)と樺太(現サハリン)の島影

日本のついで

最近では健康維持のため、週末はできるだけウォーキングを心掛けていますが、天気の良い時は、私の家からすぐ近い、市内中心部の小高い丘にある「稚内公園」を散策することが多く、途中にいくつもの短歌の碑が添えられている「短歌の道」を、程よい汗をかきながら、楽しんでいきます。

登りきったところに、戦前の旧樺太を偲ぶ、樺太慰霊碑の「氷雪の門」や「九人の乙女の碑」などがあり、いつも多くの観光客の皆さんでにぎわっている場所があります。秋晴れの日は、ここから宗谷海峡を眼下に、樺太(現サハリン)の島影が望める場所でもあり、「短歌の道」に「亡き父が夢を追いたる樺太の島影かすむ望郷の丘」という一首があるように、戦後の引き揚げ者の思いを代弁する記念碑が、他にもいくつかあります。

しかし、この場所にはこのまちと南極との、深い縁を語り継いでいるもう一つの顔があります。

稚内は、北海道の一番北でもあり、日本地図のてっぺんですから、極点と言えば南極よりは、むしろ北極に



令和3年に60回目の開催となる「稚内みなと南極まつり」

近い位置にあります。このまちではなぜか、「みなと南極まつり」という、市民挙げでの夏まつりが毎年行われています。

南極樺太犬のふるさと

なぜ、日本最北端の夏まつりの名称に、「南極」の冠がついているかというと、その起源は、昭和31年にさかのぼります。

今では大事なウォーキングコースですが、子どもの頃からこの公園は、私の最も身近な遊び場でもありました。

その場所で、私が小学校低学年の頃、あるときから急に、犬の唸り声(うなり)が聞こえて上つてはいけなと言われ、戸惑った記憶があります。

後で知りましたが、そこでは第1次南極

観測隊が、物資輸送の犬ぞりに使役するための、樺太犬の訓練を行っていました。

第1次越冬隊とともに南極に残った樺太犬19頭のうち、2頭を除いては稚内周辺の出身で、南極観測という国家的使命に、この地域が大きく貢献できた瞬間でもありました。

任務を終えた樺太犬は、第2次越冬隊とともに日本に戻る予定でしたが、凄まじい悪天候のためそのまま残され、誰もが生存に絶望を感じていた中、第3次越冬隊が南極の上空から、元気に生き抜いた「タロ・ジロ」を発見したニュースが世界に流れたとき、日本を始め全世界が、感動と興奮に包まれました。その「タロ・ジロ」が、実は稚内生まれだということは、もう少し後で知ることになりました。

国民的英雄とされた「タロ・ジロ」は、その後それぞれ別の道を歩みますが、その雄姿が映画になり、その映画で「タロ・ジロ」を演じた樺太犬は、撮影後、稚内で暮らしました。

映画の大ヒットもあって、演じた樺太犬はあちこちから引き合いがあり、全国各地を飛び回り、しばらくの間全国に「タロ・ジロブーム」が続いたことを、当時職員だった1人として懐かしく記憶しています。

訓練から60年以上たった今でも、稚内公園にある「樺太犬の供養塔」では、毎年「みなと南極まつり」がある8月の第1土曜日、



樺太犬供養塔の前で行われる「樺太犬慰霊祭」で挨拶する筆者

地元の子どもたちを中心に慰霊祭を行っていただきますし、その傍らには「南極観測樺太犬訓練記念碑」も建てられています。

また稚内では、真冬の2月には郊外の空港公園を会場にして、映画「南極物語」のテーマ曲が流れる中、本年度で37回を数える、「全国犬ぞり大会」が行われています。

今はこの地で、樺太犬を見ることはありませんが、その体力と気力は、この大会に出場する犬たちにかと、ひそかに南極の地で活躍した樺太犬たちに誇りを感じながら、全国から出場する犬たちを応援していますし、「日本のおつぺん」のまちとして、これからも南極との縁を大事にしたいと思っています。

環境と観光のまち

私は市長に就任して10年目を迎えています。この広い大地を産業振興のみならず、何らかの形でより国に貢献できる可能性について、常々考えていました。今徐々に「地球環境の保全」という観点で、形になりつつあると感じています。

市役所からは、かつて2人の職員を南極越冬隊(第46次と第52次)に参加させ、その経験を地元を持ち帰り、今でもまちの子どもたちに、南極の魅力や地球環境の変化な

どについて、伝道師としての役目を果たしてもらっています。その環境への関心が、稚内市が取り組んでいる「地球環境の保全に貢献する、再生可能エネルギーの開発」につながっています。

現在、市内には、総発電量10万kW超の、83基の風車が立っています。今後は、国とともに進められている送電網の強化により、さらに民間企業が計画する約60万kWの風力発電が追加され、これらで道内にある原子力発電所1基分に相当する発電能力を持つこととなります。

私たちはこれまで、「利尻礼文サロベツ国立公園」を擁する地域として、観光に力を注いできましたが、広大な土地、新鮮で冷涼な空気、さらには特産のホタテの貝殻



宗谷丘陵(周氷河地形)と風車群

を敷き詰めた「白い道」、そして自然に溶け込んだ「再生可能エネルギー」が生み出す景色、この風景は国内の他の地域では、決して経験できないと自負しています。

もちろん、広大な大地で展開される酪農は、バイオマス発電にも有効ですので、双方の推進にも努めていきます。

地球環境の保全のためにも、小さなまちの大きなチャレンジを、これからも継続していきたい、心からそう願っているところです。

30℃を超えることのない爽やかな夏、羽田空港と2時間弱のANA定期便で結ばれ、夏期間は、全国各地からFDAチャーター便も就航していますので、皆さんぜひお出でください。



宗谷丘陵にある「白い道」